■研究発表論文

外部空間の配置からみた民国時代南京市公館区の街区構成

Spatial Composition of the Residential Area in Nanjing from Perspectives of the Arrangement of Exterior Space, during the Period of the Republic of China

馬　嘉*　　三谷　徹*　　章　俊華*

Jia MA　Toru MITANI　Junhua ZHANG

Abstract:This paper discusses the composition of the residential area, which was planned and built as an exclusive residential area in the suburb of Nanjing, during the Period of the Republic of China, based on the analysis of the exterior space arrangement. First, there are 200 sites been chosen which are in a good state of preservation.Next, arrangement patterns are shown and clarified into 4 groups by studying the composition of exterior space and performing a cluster analysis. Then, characteristics of spatial arrangement are described by examining the influence of each group upon the street construction, and compared with the spatial arrangement of traditional Chinese residence and western residence. Finally, examine the feature of whole block through the distribution character of those 4 groups. This residential area is composed by Western-style road system, mansion and garden, but characteristics of the territory and some feature of traditional Chinese residence can also be found in this area.

Keywords: *Republic of China, residential area, composition of block, exterior space, Nanjing*
キーワード：民国，公館区，街区構成，外部空間，配置，南京

１．はじめに

本研究は, 外部空間の配置から, 公館区[1]の街区構成の特徴と, 公館区にどのような中国の伝統的な特徴が取り込まれたかを明らかにすることを目的とする。研究成果は今推進されている公館区の保護修復と近代歴史文化の研究と宣伝に有用性が期待できる。

1929年12月, 中華民国の政府は米国籍の建築家, 都市計画家, エンジニアリングを顧問に迎え，中国人建築家などの協力で「首都計画」を策定した[2]。新式住宅地の公館区は，中国の上流階層のために建設され，庭付き高級住宅が並び立ち，当時欧米の先進的な都市計画思想を手本とした計画の一つで,「首都計画」の通りに完成した唯一の住宅地である[3]。

ただ，1915年の新文化運動の影響で，国中に「中体西用」の思潮が再び広がった。それをきっかけに，社会と文化の西洋化を主張する西洋主義と，中西文化の融合を主張する文化保守主義の論争は，1940年代まで激しく続いていた[4]。「首都計画」はまさに論争の真最中に,「欧米の科学的な原則に基づき，中国の美術的な長所を取り入れる」の方針を打ち出した[5]。その背景でつくられた中国人向けの公館区は，近代租界や沿海都市で欧米住宅を模倣した外国人向け住宅地とは異なる。欧米の近代住宅地をもとに公館区を作り上げたとはいえ，すべての敷地には中国の伝統住宅のように高い塀が建てられ，庭は道路から隔てられている。所有者各自の好みで，多様な欧米住宅の様式を模倣する一方，中国の伝統建築様式と欧米の建造技術を融合しながら[6][7], 建物と外部空間が設計された。そうした個性的な住居が立ち並ぶことによってまち並が形成され，公館区の独特な街路風景を見せている[8]。

公館区の保護修復[3][9]，近代南京市の住宅問題[10][11]，都市計画[12][13]に関する研究が存在するが，いずれも外部空間の配置，公館区の街区構成については研究されていない。また，近代南京市の都市計画は田園都市思想に影響されたことが知られているが[13][14], 公館区に中国の伝統的な特徴が融合されたかどうか，またはどのような特徴が継承されたかについてはまだ研究されていない。

２．研究対象と方法

（１）研究対象地

本研究では,「首都計画」により計画し建設された公館区を対象地とする（図－1）[15]。1949年から近年まで，敷地内で建築が増設されたり，集合住宅に改造されたり，当時の風貌が失われた経緯がある。これを鑑み，資料により1930-1949年に建てられた建物と敷地をふるい分け（図－4）[16][17]，敷地範囲が明確で，改造が少なく，住宅であった200カ所を研究対象とする（図－2)。

（２）研究方法

文献調査により，民国地図，公文書，出版物などを収集し，公館区の基本情報を把握する。次に，街区と敷地内外の空間について現地調査を行う。文献調査と現地調査の結果に基づき，データと図面を整理する（図－1)。建築年代図（図－4）により1930-1949年公館区地図を作成した上, 階数図と1946年の民国地図（図－3）と合わせ，拡大平面図を作成する（図－2)。

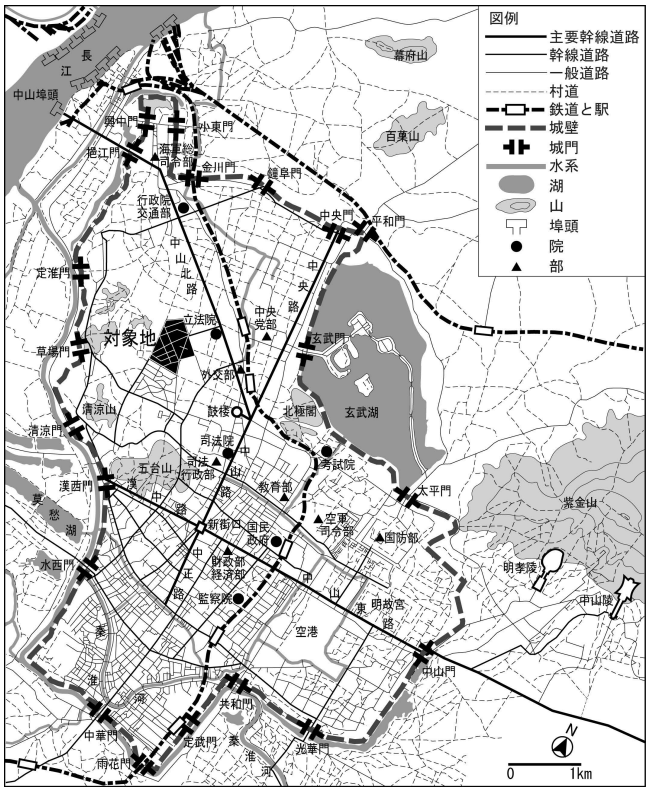
外部空間の配置を検討した上[19]-[21], 各研究対象の街路から母屋入口までの外部空間の配列をまとめる。配列は複数の隣り合う空間の連続とし，2つの空間の隣接関係をカテゴリー変量とする。配列にある空間の隣接関係を検討し，データを得る。ユークリッド平方距離を用い，Ward法による階層クラスター分析を行う。グループ間距離の変化が大きく，各グループの特徴がより理解しやすい基準で，デンドログラムを切り分けて分類する[22][23]。各グループの特徴を分析し，欧米住宅と中国伝統住宅の特徴を踏まえて考察する。さらに，得られた外部空間の配列の特徴を公館区の平面図にマッピングし，外部空間の配列の特徴からみた公館区の街区構成の特徴を明らかにする。

３．公館区の街区構成

（１）都市における公館区の立地

国民政府が都心部の混雑，住宅不足や不衛生などの問題を改善するため，19世紀の欧米を模倣し，郊外の新式住宅地を解決策の

*千葉大学大学院園芸学研究科



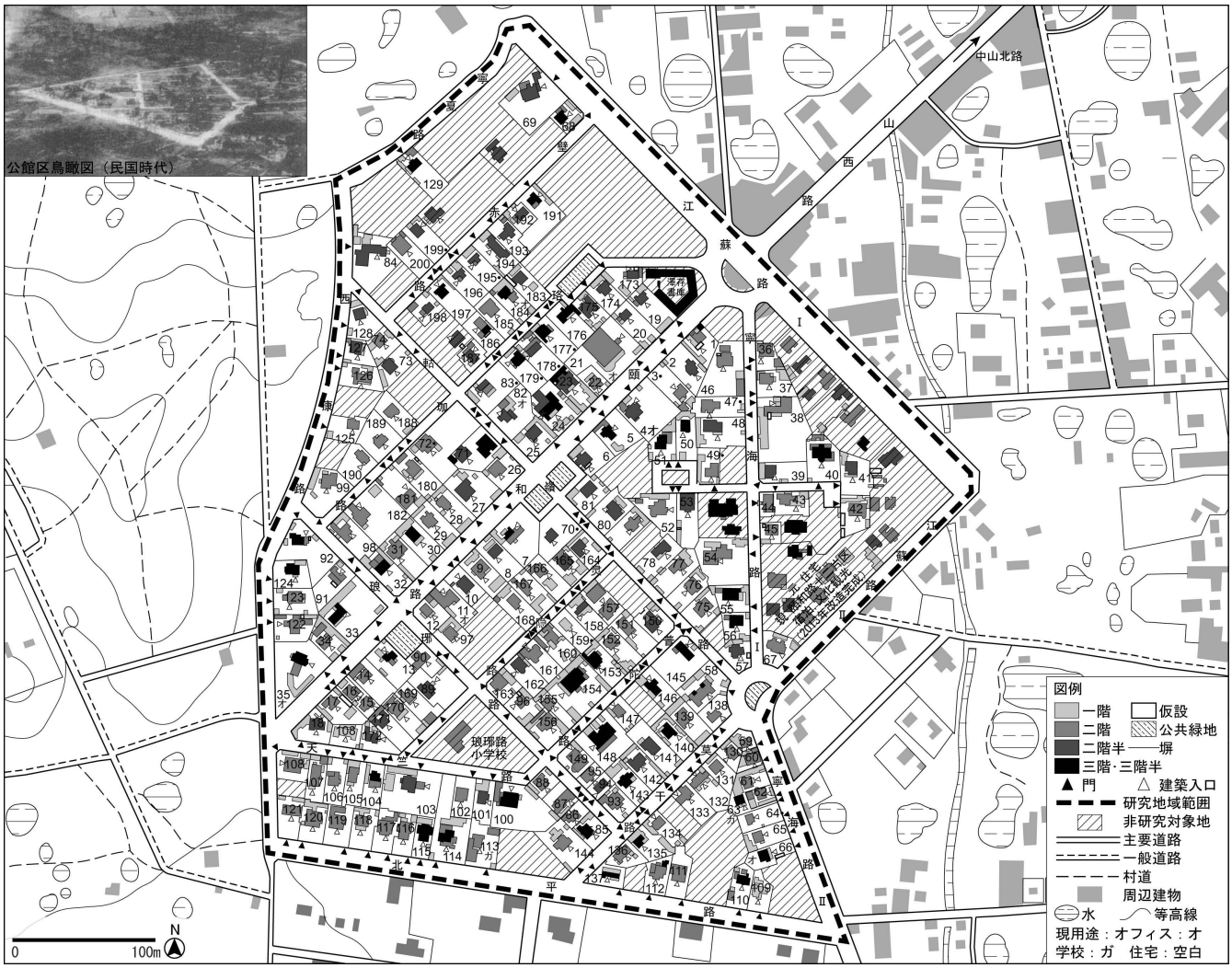
図－1　公館区の位置[15]

一つとして建設した[14)24)]。公館区は当時人口が密集している中心部から離れた西北部の郊外に位置し，「中山北路」の西南に位置する[11)]（図－1）。

（2）道路と街区

公館区は，19 世紀末から 20 世紀初頭にアメリカで発達した都市計画に大きく影響されて建設された[6)14)]。区内にある江蘇路は中山北路と平行し，それに直交する山西路を介して中山北路に接続する。区内の主要道路の頤和路は山西路の延長にある。14 本の街路は格子状と対角線の道路網を構成し，公館区を 15 の街区に分ける（図－2）。区内の道路は,幅 4m-28m に渡り，1930 年代初期に公館区の開発のために整備されたものである（表－1）。幹線道路の北平路，西康路，頤和路，寧海路，江蘇路などで歩道が整備され，中山北路と同様にプラタナス並木が植えられている[11)25)]。

交差点には（図－3）T 字路（13 カ所）[27)]が一番多く見られ，次に十字路（7 カ所），L 字路（5 カ所），袋小路（2 カ所），ロータリー付きの五差路（1 カ所）と六差路（1 カ所）が見られる。公館区の外周道路の方向は不統一であり，T 字路，L 字路，ロータリー付きの五差路と六差路が連続し，街区を取り囲む。区内と区外との連続性を確保する主要交差点には，ロータリー付きの五，六差路が配置され，街区内に向けた放射状の道路が接続する。公館区外の道路と比べても道幅が広く，区外からのアクセスを保った上，区内への通行をより重視し，区内部と外部を差別化している。さらに，街区は近隣街区と異なり，計画的な幾何学形を取り，形態上においても近隣街区と異なる領域性を形成している。また，



図－2　公館区の平面図[16)17)18)]

街区の中心部に，一見直角十字路が貫通するように見える内部街路があるが，行き止まりのT字路と袋小路が設けられ，直線で通過できない街区が構成されている。道路を折れ曲がるごとに視線が遮られ，外周道路から区内へ，区内を貫通する頤和路，寧海路からさらに内部の街区へと見通しの難しい街路構成となっている。さらに，街路と街区の向きの変化により,方向感覚も失いやすい[26)27)]。道路と街区の構成により区の領域を強めたことに加え，区内における複雑な方向性を作り出し，奥性を強める効果がある[8)]。

（3）敷地と建物

当時は，37.78ha の用地を 287 カ所の敷地に分けられた。平均建築面積は 400m²,建築密度は 20%以下，庭園緑化率は 64.8%に達する[8)]。現在区内約 54%は民国建築で，72%は住宅である。対象地の中，オフィス 9 カ所，学校 2 カ所以外，すべて住宅として使われている。母屋は 1 階建て 3 カ所，2 階建て 103 カ所，2 階半建て 54 カ所，3 階建て 38 カ所，3 階半 2 カ所がある。また，民国地図によると（図−3），緑地は 8 カ所が計画されたが，中の 3 カ所が未建設で，住宅用地として使用されている。当時に地価とコストの高い公館区は,少数の高官や資産家にしか手が届かず，社会地位と富裕の印となった[10)11)]。現在，区内にある小規模建築は個人所有であるが，90%の建築の所有権は公有，軍隊所有，または軍隊や政府が代わりに管理している[28)]。それ故，公館区全体の保存状況は南京市内の他の地域より優れている。

4．敷地内の外部空間の配列

外部空間は敷地内の屋根がかからない部分と定義する。敷地内において目的のある機能と秩序を持ち，敷地外において街区構成と街路風景の形成に関与する部分である[19)]。区内住宅の敷地は，2m 以上の塀により外界から明確に領域を分け，道路から内部を覗くことがほぼ不可能にしている。外部空間は塀と建物に囲まれた形で，家の内部の秩序に属し，室内空間と同じ重要性を持つ空間である[20)21)]。

（1）敷地内の外部空間の分類

外部空間が持つ秩序を検討するため，敷地内の建物と塀に囲まれた外部空間を空間単位として捉える。塀に囲まれた敷地内部に更に建物が配置されると，複数の囲まれた空間が生じる。一つの敷地内にある空間単位の面積の大きさにより，一番広いものをメインオープンスペース（Om）とする（図−5）[19)20)21)]。Om は修景用の緑地を設けて，または舗装を敷いて主要な活動空間として使用される空間である。Om 以外の外部空間の中，D/H=1（空間の幅 D と建物の外壁もしくは塀の高さ H の比率）は境として，D/H<1 の時には近接した感じ，D/H>1 の時には離れた感じとなるため[20)]，D/H<1 で，前後二つの空間を接続する空間をパスオープンスペース（Op）とする。また，1<D/H<2 の場合，両端に別の空間が接続され，通路の役割を持ち，明確な空間分節が有するという 3 三つの条件を満たした空間も Op とする。Om と Op 以外の，ほかの空間と明確な分節を持つ外部空間をサブオープンスペース（Os）とする。Os は Om より相対的に小さい。植物が植えられる場合もあるが，主に舗装空間で，入り口や建築に付属した補助的な空間である。

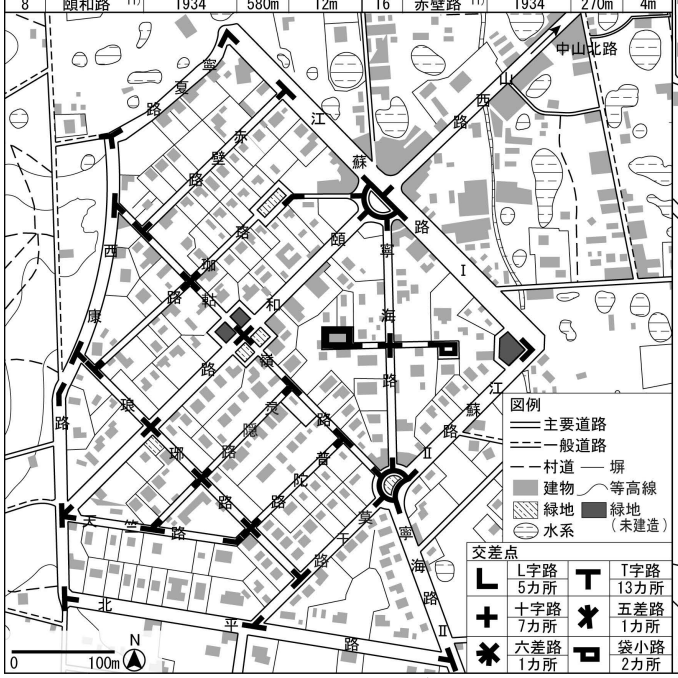
（2）敷地内外部空間の配列パターン

外部空間の大小と類別を分け，門から母屋のメイン入口まで経過する動線に合わせて配列を整理する。階層クラスター分析を用いて分類を行い，4 つのグループが得られる（図−6）（下記「グループ」は「G」と略称する）。

GA は一番戸数が多いグループであり（92 カ所），配列が一番単純である。すべての研究対象において，Om は道路と直接に接続し，Om を介して道路から母屋へ至る。GA のうち，A-1（86 カ所）の外部空間は Om のみで構成される。A-2（1 カ所）と A-3（5 カ所）で，母屋の裏に Os も設置される。A-2 では Os と Om

表−1　道路

番号	名称	建造年代	全長	道幅	番号	名称	建造年代	全長	道幅
1	山西路 [25)]	1931	460m	18m	9	琅琊路 [11)]	1934	430m	6m
2	江蘇路Ⅰ [25)]	1930-1934	600m	24m/28m	10	天竺路 [11)]	1934	280m	6m
3	江蘇路Ⅱ [25)]	1930-1934	260m	18m	11	軲嶺路 [11)]	1934	550m	4m
4	西康路 [25)]	1930-1934	630m	18m	12	莫干路 [11)]	1934	260m	4m
5	北平路 [25)]	1933-1934	540m	28m	13	普陀路 [11)]	1934	170m	4m
6	寧海路Ⅰ [25)]	1934	360m	8.8m	14	灵隱路 [11)]	1934	270m	4m
7	寧海路Ⅱ [25)]	1934	250m	12m	15	珞珈路 [11)]	1934	460m	4m
8	頤和路 [11)]	1934	580m	12m	16	赤壁路 [11)]	1934	270m	4m



図−3　道路と交差点[17)]

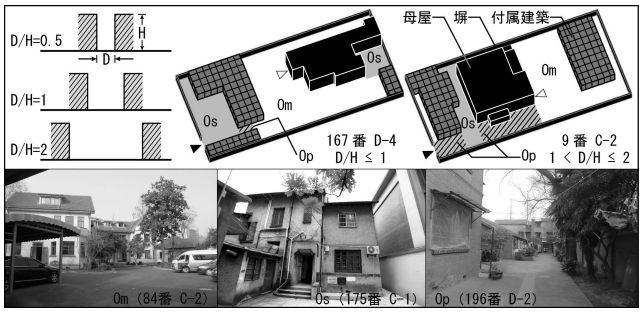
図−4　建築年代図[16)]

が建物で隔てられているが室内空間を介して接続し，A-3 では Os と Om が建物と塀により分節されて室外で繋がれる。

GB に含まれる戸数は一番少ない（27 カ所）。すべての研究対象において，Om は道路側に，Os は敷地の奥に配置され，Op は通過空間として Om と Os を繋ぐ。B-1（3 カ所）と B-2（23 カ所）では，Om が道路と直接に接続し，B-1 では奥の Os から母屋に入り，B-2 では道路側の Om から母屋に入る。B-3（1 カ所）では Os が道路と直接に接続し，その奥に Om が配置され，Om から母屋に入る。また，Om から Op を通過して奥の Os に至る。

GC（30 カ所）の研究対象において，Om は敷地の奥に配置され，Os が道路側に配置され，道路と接続する。1 カ所だけ（C-2, 167 番）Om も道路側に配置される。C-1（12 カ所）と C-2（1 カ所）では，道路と接する Os から敷地に入り，Op を通過して Om に至り，Om から母屋に入る。だが，C-1 では Om が母屋の裏側に配置され，C-2 は Om が Os と同じく道路側に配置される。C-2 の Om はさらに建物と塀により分節された Os と接続する。C-3（5 カ所），C-4（11 カ所）C-5（1 カ所）では C-1 と同じ道路側に Os,奥側に Om が配置される。C-3 では Os と Om が建物で分断されて室内空間で繋がり，C-4 では Op を介して Os と Om が繋がる。C-5 では C-4 と同じく Op が Os と Om を繋ぐが，母屋の入り口が Op に設置される。

GD（51 カ所）は一番バリエーションの多い類型である。先述の 3 つのグループと異なり，Om と Os いずれも道路と直接に接続しない。道路と敷地の境目に，門が敷地内に向いている付属建築（文中「倒座房」[30] と呼ぶ）を配置し，倒座房に門を設ける。入口は左右の壁面に挟まれ，通過空間 Op を形成し，Op を通り抜けて敷地に入る。D-1（2 カ所）D-2（35 カ所）D-3（6 カ所）では，道路から順次に Op と Om を経由して母屋に入る。D-1 では Om に Os が連結され，D-2 では Op と Om だけ備えられ，D-3 では Om から Op を通って奥の Os に至る。D-2 の中 18 カ所は，母屋が敷地の奥に面するため，道路から Op と Om を経由し，母屋の別の面から入る。また，D-4（4 カ所）D-5（3 カ所）D-6（1 カ所）では，Os が道路側に配置され，入口の Op と連結し，Om が母屋の裏側に配置される。D-4 では道路から Op-Os-Op-Om を経由して母屋に入る。D-5 と D-6 では道路側の Os から母屋に入り，D-5 では Os が Op を介して Om と繋がり，D-6 では室内空間を介して Os と奥の Om を連結する。



図―5　外部空間の類型

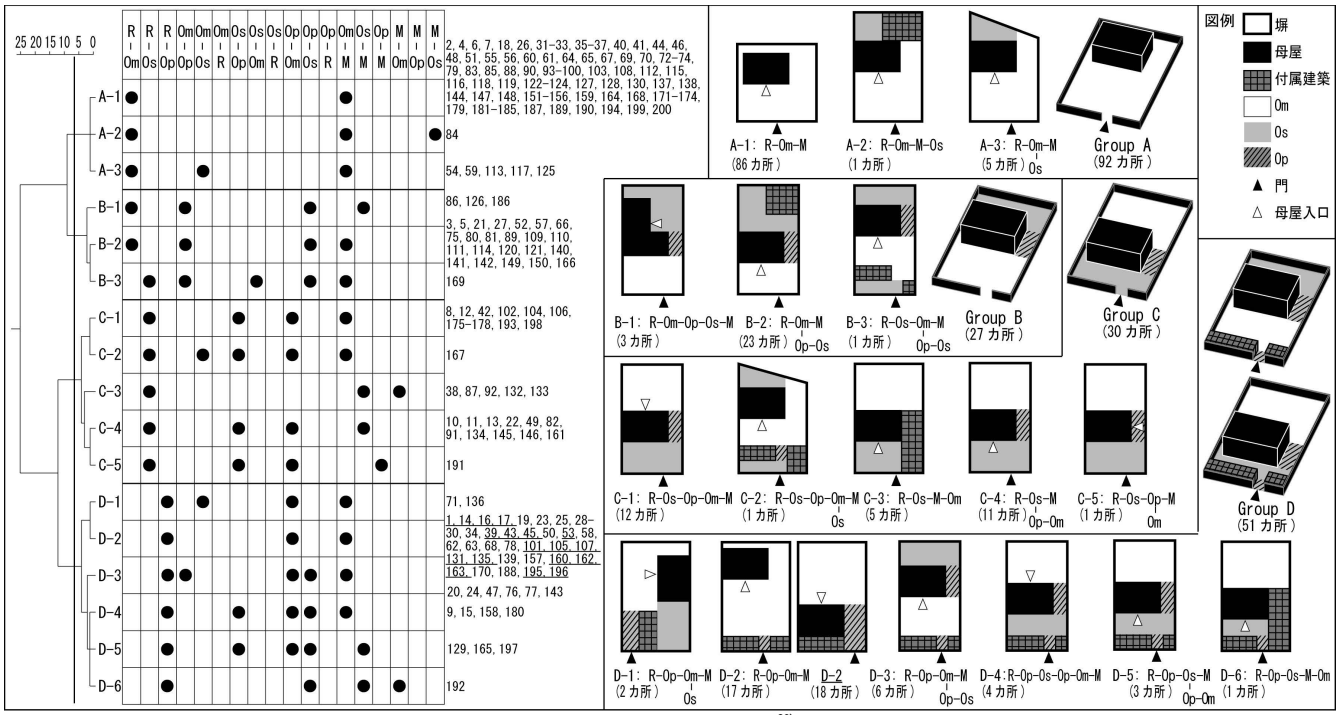
（3）欧米住宅と中国合院式住宅の配列

公館区内公館区の住宅の外部空間が欧米住宅と中国伝統住宅からどのような影響を受けたかを検討するため，欧米と中国の典型的な例について外部空間を Om，Os，Op に分けて整理し，配列をまとめる（図―7）。

欧米住宅では前庭や裏庭，中庭など多様な外部空間を有すると見られる。本研究においてすべてをあげ尽くせないため，公館区の計画と時代背景を踏まえ[31]，アメリカ郊外住宅地にある住宅の一種[24]を例として配列を検討する。中国伝統住宅では，合院式住宅は長い歴史を持ち，四合院は最も分布が広く，三合院は中国南部でよく見られる。中でも，三進四合院は上流階級の住居と言われる[21)32)]ため，三合院と三進四合院について配列を検討する。

アメリカの郊外住宅地では，母屋は道路に面し，前庭や裏庭が備えられ，道路と敷地の間に塀が設けられず，道路から前庭と母屋が見え，街路景観の一部となる[8)20)]。

三合院と四合院のいずれも塀と建物に囲まれた外部空間を持ち，敷地内の空間は外部から遮断される。三合院では，塀に設けられた門から敷地に入り，中庭（Om）を通って母屋や付属建築に至る。敷地内と外は分割され，塀や建物の屋根，樹冠（樹木が植えられた場合に限る）が街路景観の一部を構成する。三進四合院で



図―6　外部空間の配列[29)]

は，塀の代わりに道路と敷地の間に，使用人部屋や応接間として使用される倒座房が配置され，倒座房に設けられた通路（Op）を介して敷地に入る。中に前庭（Os）と中庭（Om）が順番に接続され，中庭母屋や各建物に入る。中庭にはさらに通路（Op）が接続され，母屋後ろの女性家族が使う裏庭（Os）に至る。倒座房には小さい窓と門しか設けられず，道路から敷地への視線は完全に遮断され，領域性が強まる。道路からは中の様子が伺えず，倒座房と開口部が街路景観の一部を構成する。

（4）敷地内外部空間の配列の特徴

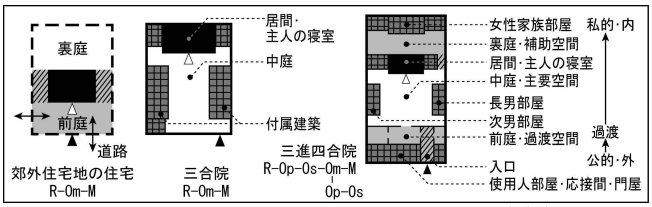
上記を踏まえ，公館区の外部空間配列の特徴を検討する。

GA 全体においては，門から広い中庭（Om）に入ってから母屋に至る特徴が見られる。A-2 と A-3 では補助的な裏庭（Os）も設けられている。高い塀で道路空間と明確な境界を設け，家族向けの閉鎖的な外部空間を作り上げる。塀と樹木で囲った前庭を道路側に配置することにより，道路と母屋の間に移行空間ができ，内部のプライバシーと安静さを保つ。また，道路からは塀と樹木，母屋の上部が見える。母屋と庭の配置は欧米住宅を踏襲しながら，塀による領域の分け方や，街路景観との関係は三合院に近い。

GB すべての研究対象では，広い庭（Om）が道路側に配置され，そこから通路（Op）を通り抜けて裏庭（Os）に繋がる特徴が見られる。敷地奥の裏庭は，付属建築とともに利用され，私的で補助的な空間として使用される。B-1 と B-2 では，前庭（Om）に通路（Op）が設けられ，奥にある裏庭（Os）に繋がる。B-2 では前庭から母屋に入り，B-1 では門から玄関が見えないように裏庭を介して母屋に入る。広い前庭が道路側に配置されることにより，塀と樹木の二重構造ができ，公私空間を隔てる緩衝が入り，塀と樹木，母屋の上部が街路景観の一部を構成する。B-3 では前庭（Os）から中庭（Om）を経て母屋に入り，また中庭から通路（Op）を介して裏庭（Os）に繋がる。B-3 においては，前庭は街路から私的な領域への移行空間となる。前庭と中庭の間に建てられた付属建築により空間が分割され，街路からの視線も遮断され，奥の空間とのプライバシーを保つ。塀と付属建築の屋根が街路景観の一部となる。GB の母屋と前庭，裏庭の配置は，欧米住宅との類似性が見られるが，塀によりできた領域境界，塀と前庭空間と建物の屋根の 3 つの要素で構成された街路景観は三合院に近い。また，B-1 と B-3 では母屋入口を門から見えない位置に設置する特徴は中国伝統住宅の影響を受けたと考えられる。

GC では，前庭（Os）が道路側に配置される特徴が見られる。前庭は半公的な移行空間であり，奥の私的空間と分けて配置される。C-1 では前庭（Os）から通路（Op）を通過して奥の広い裏庭（Om）に至ったのち母屋に入る。C-2 では前庭（Os）から通路（Op）を通過し，表側の中庭（Om）から母屋に入る。母屋入口の方向が逆であるが，両方とも門から玄関までの視線が遮断されている。C-3, 4, 5 も C-1 と同じく，前庭（Os）と広い裏庭（Om）を有するが，C-3 C-4 では前庭から，C-5 では前庭と裏庭を連接する通路から母屋に入る。奥にある空間や庭は家族だけで用いる。また，前庭が狭く，樹木が植えられる場合も少ないため，道路から見ると C-1, 3, 4, 5 は塀と母屋の上部が街路景観に影響する。C-2 は B-3 の場合と同じ，塀と道路側に配置された付属建築の屋根が街路景観に影響を与える。GC は GB と同じく，母屋と庭の配置は欧米住宅と類似しながら，領域境界と街路景観の形成は三合院に近い。また，C-1，2，5 では門から母屋入口までの視線を遮断する特徴は中国伝統住宅からの影響だと考えられる。

GD では道路と敷地の間に倒座房を配置し，建物と塀により形成された入口空間を設ける特徴が見られる。D-1，2，3 は入口の通路（Op）から広い前庭（Om）を経由して母屋に入る。D-1 と D-3 は裏庭（Os）が設けられる。一方，D-4，5，6 では入口の通路（Op）から狭い前庭（Os）に入り，敷地の奥に広い裏庭が配置されている。D-4 と D-5 では前庭と接続された通路（Op）から広い裏庭（Om）に至る。また，D-4 では裏庭から，D-5 と D-6 では前庭から母屋に入る。GD では道路と敷地の境界に倒座房が設置されているため，街路から中の様子を覗くことがほぼ不可能である。D-1，2，3 の前庭に植えられた高木が倒座房の屋根を超えて，街路から見える場合もあるが，D-4，5，6 多くは前庭が舗装で構成され，樹木が少なく，倒座房と母屋の上部が街路景観を構成する。いずれの場合でも，道路に沿って続く倒座房が街路の形成に影響を与える。GD も母屋と庭の配置は欧米住宅との類似性が見られるが，倒座房が敷地内部と街路の領域を切り分け，街路景観を形成することは，四合院に類似すると考えられる。



図－7　欧米住宅と中国伝統住宅の配列 [20)21)24)]

欧米住宅，三合院，三進四合院の外部空間の配列と街路への影響と合わせて考察した結果，公館区の住宅では，母屋と庭の配置は欧米住宅との類似性が見られる。一方，GA，GB，GC の塀，前庭空間（植物が植えられた場合は植物の上部），建物の屋根が街路景観の一部を構成する特徴は，三合院にも見られる特徴である。GD 倒座房が敷地領域と街路空間を分割し，倒座房の外壁が街路景観に影響する特徴は，四合院と類似性があるものと考える。

5．敷地内外部空間の配列からみた街区構成の特徴

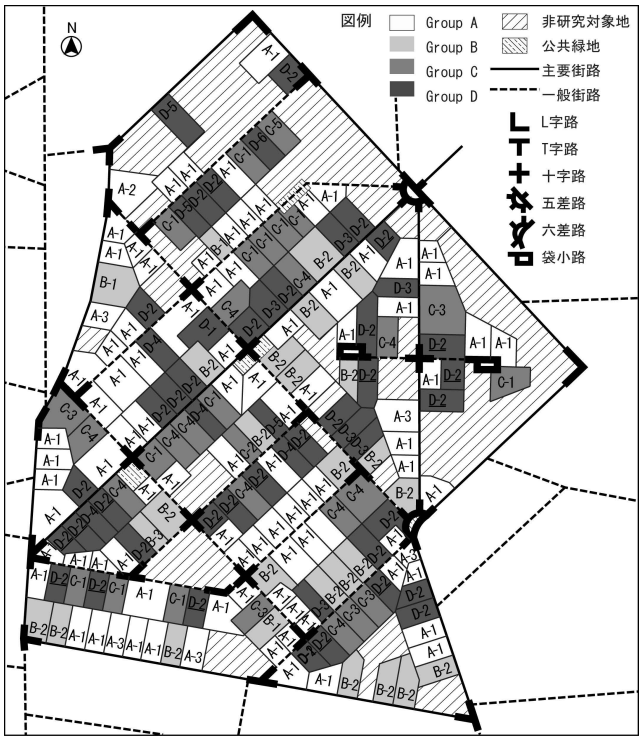
公館区においては，外部空間は街区を構成する重要な一部分であるため，前述を踏まえて，街区構成の特徴を考察する（図－8）。

GA は区内に広く分布する型である。特に，外周道路である西康路の東側と北平路の北側，区を貫通する寧海路と琅琊路，区の奥にある珞珈路と普陀路において連続分布が見られる。A-1 が一番多く分布しているのは，珞珈路（15 カ所，後文で「カ所」を省略），寧海路（14），琅琊路（13）である。戸数の少ない A-2 は西康路（1），A-3 は北平路（2），寧海路（1），西康路（1）に分布する。GA が集中している道路では，広い前庭を敷地の表側に配置し，塀と塀を越しに見える樹冠が連続し，統一感を生み出す。また，母屋が敷地の奥に置かれ，塀と樹木の二重構造で内と外を遮り，緑があり深閑としているまち並みが形成される。

GB のうち 20 カ所は道路の北側に分布し（B-2:18 カ所，後文で「カ所」を省略，B-1:1，B-3:1），7 カ所は道路の南側に分布する（B-2:5, B-1:2）。多くの研究対象は，広い前庭が敷地の南側（表）に，裏庭が北側（奥）に配置され，玄関が南に向く。また，連続分布は北平路と莫干路で見られ，B-1，B-2 と GA との隣接分布は外周の北平路と西康路，区を貫通する頤和路で見られる。それらの道路では，広い庭が表側に並び立ち，塀と塀を越えて樹冠が続き，街路景観に一体感と邸宅の荘厳感を与える。

GC のうち 25 カ所は道路の南側に分布し（C-1:12, C-3:4, C-4:8, C-5:1），4 カ所は道路の北側に分布し（C-2:1，C-3:1，C-4:3），1 カ所は道路の東側に分布する（C-3:1）。多くの研究対象は，狭い前庭が敷地の北側（表）に配置され，広い裏庭が南側（奥）に設け，玄関は南または北方向に向く。連続分布は外部と連続性が良い頤和路と莫干路，区の奥にある珞珈路で見られる。GA と GB と比べ，母屋が門に近く，主要な庭が公的空間から離れて敷地の奥に配置されるため，外から見ると緑が少なく，塀と母屋上部が街路景観を構成する。

GD のうち 29 カ所は道路の南側に（D-1:2，D-2:20，D-4:4,



図－8 外部空間配列分布[33)]

D-5:2，D-6:1），19 カ所は道路の北側に（D-2:13，D-3:5，D-5:1），2 カ所は道路の東側に（D-2:2），1 カ所は道路の西側に分布する（D-3:1）。D-1,2 は道路の南側に多く位置するが，そのうちの 21 カ所（D-1:2，D-2:19）は，母屋が南側に面し，広い庭も敷地の南側（奥）に配置される。母屋北側の門から通路を通過し，母屋南側の庭に至る。他の道路北側に位置するものの中，D-2，D-3 は広い前庭を表側（母屋の南側）に設け，D-4,5,6 は広い裏庭を敷地の奥に（母屋の南側）に設ける。区を貫通する頤和路，外との連続性が薄い赤壁路と霊隠路で連続分布が見られる。倒座房の外壁が連続し，街路景観に大きな影響を与える。

これらのことから，区の外周では GA と GB が分布されることにより，塀と樹木の二重構造で敷地内の奥深さを強め，深閑とした街路を形成し，公館区の領域性を強調する。区を貫通して外部との連通性が良い頤和路，寧海路と琅琊路に沿って入っていくと，GA の連続が見えつつ，GC と GD の連続が多く見えてくる。塀を越えた樹木や母屋が見えるが，塀と倒座房が連続し，壁面が長く続く街路景観が形成される。奥にある道路へ進むと，珞珈路と普陀路では塀と樹木が並び，赤壁路と霊隠路では倒座房が連続し，街路を形成する。道幅が狭くなり，邸宅の荘厳さも倒座房の秩序もさらに強まる。公館区の外から奥に至る中で，違う街路では違う表情が生み出されつつ，街路ごとに性格がつけられている。さらに街路と街区の方向が変わり，かつ T 字路などの交差点により視線を遮ることにより，公館区の領域性と奥性が強められてゆくと考えられる。

アメリカの近代住宅区では，前庭と道路の間に塀がなく，倒座房も建てられておらず，前庭や母屋が街路景観の一部となる。一方，中国の伝統住宅地では三合院や四合院が並び立ち，三合院の塀または四合院の倒座房の外壁によりまち並が形成し，その奥に庭を設ける。本研究で検討された公館区は，欧米の近代住宅地から街路街区の形，建物の様式，外部空間の配置などを模倣して作り上げたと言われている。しかし，塀や倒座房により敷地境界を区切り，まち並を形成しているため，内部の環境や生活風景が街路景観に影響することが少ない。この点から見ると，公館区の街路景観の形成には，中国の伝統的なまち並からの影響も受けたのではないかと考えられる。

６．おわりに

南京市において，民国建築の老朽化や増改築が進んでいる中，近年来修復と活用が重視されてきた。しかし，その過程では，外部空間や街区構成が重視されず，歴史的なまち並が消えつつある。さらに，参考となる関連研究が少ないため，外部空間に対する修復は手をつけにくい部分でもある。本研究は，資料に基づき，公館区の外部空間の配置に着目し，外部空間の連続によりできた街区構成について分析した。公館区の外部空間と街区構成は，欧米の近代住宅地を模倣したものでありながら，中国の伝統住宅にある倒座房などの特徴にも影響されていることが明らかになった。この成果が今まで着手できなかった公館区の外部空間の保護と修復に対する有用な知見を提供し，公館区のまち並に関する理解を深め，今後の民国時代の外部空間の研究に役たつことを期待する。

謝辞：クラスター分析に対してご助言とご指導を賜った千葉大学緑地環境情報学研究室の本條毅教授に深く感謝する。

補注及び引用文献

1）「公館区」は「頤和路公館区」のこと，「第一住宅区」，「新式住宅区」とも呼ばれる。
2）Henry Killam Murphy(1877-1954)：米国籍の建築家，1899 年イェール大学卒業（建築学）。Ernest Payson Goodrich（1874-1955）：米国籍の都市計画家とエンジニアリング，ミシガン大学卒業（土木工学）。呂彦直（1894-1929）：1918 年コーネル大学卒業（建築学）。
3）蔡琰（2007）：南京頤和路民国建築保護の原真性与文化伝承：上海城市管理職業技術学院院報，26-28pp
4）楊秉徳（2002）：中国近代中西建築文化交融史：湖北教育出版社，352 pp　「師夷長技以制夷」「中体西用」：中国伝統的な学問や制度を主体に，西洋の技術文明を利用する。
5）（民国）国都設計技術専員弁事処（1929）：首都計画：南京出版社，270 pp
6）ジョン・A・ピーターソン（2011）：アメリカ都市計画の誕生：鹿島出版会，350pp
7）盧海鳴（2002）：南京民国建築評析：城市管理 62, 35-39
8）槙文彦（(1980）：見えがくれする都市―江戸から東京へ：鹿島出版会, 230 pp
9）許峰（2012）：基于文物法規的南京頤和路民国公館区保護研究：南京芸術学院，42pp
10）侯風雲（2010）：1927-1937 年南京住房問題之考察：江蘇社会科学 2010(2), 206-210
11）陳蘊茜（2011）：国家権力，城市住宅与社会分層――以民国南京住宅建設為中心：江蘇社会科学：2011(06)，223―230　中山北路：西北-東南方向，孫文の霊柩を北京から南京紫金山にある中山陵に移すために 1929 年に修造され，当時多くの政府機関は中山北路の両側にあった。
12）樹軼（2006）：近代南京市都市計画策定過程と内容に関する研究(その 2)：1929 年「首都計画」：日本建築学会学術講演梗概集 F-2，建築歴史・意匠 2006，339-340
13）樹軼，石田壽一（2007）：近代南京市都市計画策定過程と内容に関する研究(その 3)：田園都市計画理念の導入：日本建築学会研究報告．九州支部. 3，計画系 (46), 777-780
14）田中重光（2005）：近代・中国の都市と建築：相模書房，391pp
15）南京出版社（2012）：南京旧影・老地図 1948：南京出版社，1 pp
16）南京市規劃局，南京市城市規劃編制研究中心：頤和路歴史文化街区保護規劃（公衆意見征詢）：南京市規劃局ホームページ<http://www.njghj.goO.cn>，2013.1.17 更新，2013.3.18 参照
17）南京市城市建設公文書館：民国時代軍事地図，1 pp
18）図―2 中番号に「・」が付くものは民国地図をもとに塀の位置を調整したものである。塀と母屋に脇門や裏門が備える場合もあるが，外部空間の主要な配列を取り上げるため，また年代が特定できないため，主な入口のみ平面図に示す。写真は葉兆言（1999）：老南京：旧影秦淮：江蘇美術出版社，257pp から引用する。
19）足立真（2000）：配置と動線からみた外部空間の性格：囲まれた外部空間をもつ道路型集合住宅の構成 (1)：学術講演梗概集 F-2，建築歴史・意匠 2000, 533-534
20）芦原義信（2001）：街並みの美学：岩波現代文庫，301pp
21）荊其敏（2007）：中国伝統民居：中国電力出版社，168pp
22）日本建築学会（2012）：建築・都市計画のための調査・分析方法［改訂版］：井上書院，269pp
23）章俊華（1999）：中国皇家庭園頤和園における「扁額」からみた庭園空間の特徴について：ランドスケープ研究：日本造園学会誌，62（5），761-764
24）フランソワーズ・ショエ（1983）：近代都市―19 世紀のプランニング：井上書院，141pp
25）鼓楼民国建築編委会（2006）：鼓楼民国建築：中国文史出版社，257 pp
26）大淵博文（2008）：近代南京における道路パターンの形態構成に関する研究：1920 代南京首都計画および中国近代都市計画に関する考察：日本建築学会研究報告.九州支部. 3,計画系(47), 897-900
27）八木英訓（2006）：格子状道路における歩行者の空間構造認識に関する研究：土木学会 景観・デザイン研究講演集 No.2, 70-7627）
28）黄瑛（2009）：浅議産権帰属与南京民国居住建築的保護― 以頤和路地区為例：城市規劃 33(9), 58-63
29）図―6 中の各研究対象の平面図は図―2 に参照する。各類型図は外部空間の配列を明白に表すため，外部空間の分節に直接な影響のない付属建築が省かれる。
30）中国の伝統的な建築では，正面が母屋の正面と相対し，道路に後ろを向く付属建築のことを「倒座房」と呼ぶ。文中では，入口は敷地内に設けられ，道路に面していない付属建築のことを「倒座房」と略称する。必ずしも敷地境界線いっぱいを占めるではない。
31）公館区が計画された「首都計画」は近代アメリカの都市計画に影響され，顧問の二人もアメリカ人である。また，アメリカでは，19 世紀末-20 世紀初頭にかけ，都市の混雑と騒音から離れた郊外で中流階級向けの住宅地の建設が発達していた。
32）賈珺（2009）：北京四合院：清華大学出版社，255pp
33）図―7 中分布特徴が明瞭に示すため，街路と塀は省略化されたものである。